

## 中国・成都の書店事情

よしかわ たつお  
吉川 龍生  
(経済学部准教授)

中国の成都に行かれたことはあるだろうか。三国時代の蜀の都であり、現在は四川省の省都である。中国内陸部の古都というと、発展から取り残されていそうな印象を持たれるかも知れないが、実際は中国西南地区最大の大都市である。諸般の事情で成都には毎年のように足を運んでいるのだが、2015年4月の訪問時に新しい巨大書店が出現していたこともあり、成都の書店事情をご紹介します。

新たに出現した巨大書店の名前は“方所”である。春熙路という東京でいえば銀座のような繁華街の地区にある。地上は伝統建築を採り入れた建物の中に高級ブティックがずらりと並ぶ太古里というショッピング街、その地下1階に2015年初めにオープンした。インターネットで調べてみると、1フロアだけの店舗で4000平米超あるとのこと、東京ドームの三分の一ほどの売り場面積である。親会社は“例外”という名前の広州のアパレル企業で、1号店は広州にあるらしい。

方所に入店してまず感じたのは、お店の作りがとてもおしゃれだということである。台湾人デザイナーの設計という店内は、スポットや間接照明が多用され、書架や壁、壁面に渡り廊下ふうに作られた通路の床は木材が使われ、明るすぎず落ち着いた雰囲気を出している。また、店内には比較的大きなカフェがあり、日本のジュンク堂書店や蔦屋書店、台湾の誠品書店と同じような雰囲気を感じた。

店の入口付近には売れ筋の平積み of 書籍が並び、その次に目立つ書架に並べられていたのは輸入書であった。社会科学や文学の英文の書籍が種類豊富に並んでいる。少し奥まったところには、日本語の書籍・雑誌や、日本の書籍を翻訳したものも多数並んでいたが、こちらは料理やファッション、インテリアなどに関するものだった。輸入書や外国関連の書籍の豊富さに比べ、筆者が専門とする中国文学関連の書籍はあまり充実していなかった。また、中央の広いスペースには、文具や日用雑貨が並べられていたが、日本製の文具はもちろん、南部鉄器や盆栽まであり、ファッションとして外国文化を強調するような店作りがされているように感じ

た。日本語の書籍にしても、文具・雑貨にしても、日本での値段の数倍から10倍くらいはして、訪日中国人が大量に購入して帰るのもよく分かる。

店を見て回る中で、問題点も感じた。客が自分では操作できない有人の検索端末が、確認できただけで店内3箇所にのみ設置されていたが、人が並んでいることが多く時間がかかり、本を探すにも膝から下の位置の書架に本が多数並んでいて探しにくかった。また、中国の書店ではよく見かけることだが、“立ち読み”どころか、階段やフロアに長時間座り込んで商品を読みふける客も依然として多い。書籍を購入せずにメモや写真をとったり、はなから目当ての本を読了することを目的に来たりと、いわば“図書館”のように書店を利用しているわけだ。

春熙路地区には、かつて全国十大書城の一つと謳われた新華書店系の西南書城という巨大書店があるが、客が多かった頃は“図書館”状態がひどく、多くの商品が傷んでしまっていた。西南書城は、ここ数年で一気に劣化が進み客足が完全に遠のいている。

一方、巨大化とは違うコンセプトで成都に進出してきた書店もある。貴州省遵義が発祥の西西弗(シジフォス)書店である。2011年、春熙路のデパートの地下に開業した。同じフロアのすぐ近くに日本のラーメン店・一風堂が入っているのだが、西西弗書店の面積は、大きめのラーメン店の客席と厨房を合わせたくらいの広さである。小規模ながら、店員がセレクトした良書が並び無駄がない。どの店員も書架をよく把握しているので、配架場所や在庫の有無をすぐに答えてくれるし、座り込んで商品を長時間読みふける客もいない。新しく出た本で買いたいと思っていたものがまとまって並んでいたりするので、短期出張で手際よく本を買いたい筆者には有り難い存在である。

中国でも書籍のネット購入が一般化しており、実店舗を持つ書店の経営が難しい時代になっていると言えるが、これら成都の書店がどうなっていくのか、今後の短期出張の楽しみとしたい。